

中世荘園比定地の持続における土地形質の転用		修士論文最終合同発表会 2021.2.6 5219A099 細井菜々子
—美濃国大井荘を対象として—		
0. レジューメ構成と調査目的	0-2. 研究目的	0-4. 既往研究
序論	本研究は、既往の荘園の研究成果を元に、集落の成立当初から自然的・人為的災害への対応過程を通し中世～近世の開発による持続の在り方について示す。具体的な研究目的は以下の通りである。	①〈千年村〉研究 ○鈴木明世「地質地盤と社会構造の変遷からみる千年村の持続形態―群馬県利根川流域の千年村を対象として―」（2017 年度早稲田大学建築史研究室修士論文） 一つの流域に着目し、地質基盤やムラの歴史的変遷を踏まえた上で、土地の成立や〈千年村〉の立地における巨視的分析・村落の構成原理などの微視的分析から〈千年村〉の持続要因について把握した。〈千年村〉の地質地盤をもととする自然的立地条件と、各時代のムラにおける同族意識の性格の合致により、安定的な持続形態を獲得したことを述べた。
0-1. はじめに	①中世荘園制度下における地形開発の条件と、近代以降の開発における対応可能性について示すこと	○甲斐貴彬「地形・地質からみる中世荘園地の立地的特質―福井平野及び鯖江・武生盆地を対象として―」（2018 年度早稲田大学建築史研究室修士論文） 荘園プロットの研究手法を福井県内の平野及び盆地にて適用した。複数の荘園を史料への初出年代を基準として編年分析を行った上で、立地傾向と現在見られる集落への影響について、地質・地形の観点から比較を行った。
0-2. 研究目的	②「輪中」を中心とした水防文化が、村落の持続に与えた影響を明らかにすること	②荘園研究 A) 古文書分析を通した村落構造の把握 B) 荘園絵図分析・フィールドワークを主体とする詳細な復原研究 C) 上記 AB の手法を合わせた荘園の空間・景観復原
0-3. 研究方法	③輪中および大井荘（現大垣市）荘域内における集落形態の変遷過程を、場所の固有性を規定する先行形態として読み解くこと	③大井荘に関する研究 海老澤英「既存荘園村落情報のデジタル・アーカイブ化と現在の IT 環境下における研究方法の確立」美濃国大井荘（現岐阜県大垣市）を対象に、GIS ソフト等や文理融合の千年村の理論を新たに導入し、荘園の枠組みの復原と、荘園の枠組みを残しつつ近世の城下町へ移行した生成・発展・消滅の過程を明らかにした。 これに対する書評内で、以下の点が課題として挙げられる。 ・中世後期～近世初頭の大井荘の歴史について ・大井荘における在地構造、村の問題 ・地理学・考古学的考察の必要性
第一章 大井荘の変遷	本研究では、岐阜県大垣市を対象としている。古代の条里プラン及び東大寺領の荘園が設置され、古代から中世を通して営まれた荘園地がそのまま城郭化し、自然災害や戦争等の人為的災害を乗り越え持続した形跡を確認することができる地域である。現在は戦後復興に伴い市街地化が進み、当時の景観を直接望むことは難しいが、荘園研究を始めとする既往の研究成果による復原された景観を確認することができる。	0-5. 本研究の位置づけ
1-0. 本章の概要	前述の研究目的及び対象地域をふまえた上で、以下の手順で研究を進める。	1. 大井荘の変遷 本章では既往研究をもとに、美濃国大井荘における荘園の発生から消滅まで、荘園から城郭及び城下町への移行展開について通史的に整理を行った。
1-1. 大井荘の荘域	①古代・中世・近代にかけた土地の開発過程及び荘園制度について、大垣市における展開事例をふまえた上で整理する。【第 1 章】	①成立期（古代）（8 世紀後半～ 10 世紀末頃まで） 天平 15（743）年の墾田永年私財法及び天平勝宝元（749）年の有力寺院を対象とした墾田の勅施入により、一部の貴族や有力土豪による開発がなされた。東大寺の開墾は、畿内からの距離とその土地の微地形条件に依存し、美濃国においては、自然堤防帯の後背湿地部を中心に、用排水溝の開削と共に開拓が進められた。
1-2. 大井荘の成立から崩壊	②大井荘（現大垣市）の位置する地質・地形の基礎情報及び対象地域内における特徴的な地形についてまとめる。特に、対象地域で特徴的な構築物として挙げられる「輪中」についてまとめる。【第 2 章】	①成立期（中世）（10 世紀～ 12 世紀末頃まで） 荘園内での居住を前提としない古代荘園に対し、中世荘園は現地の農民や村落・田畠周辺を取り巻く山野河海を含む領域を荘域として取り込む性質がある。開発領主である大中臣氏による荒野の開発と東大寺への寄進により、古代条里地割を基準に明確な荘域が決定され、国司の支配を脱し住民と荘園領主によって荘園の支配体制が確立される動きが確認される。
1-2-1. 古代（8～10 世紀）における大井荘の形成	③大井荘の位置する濃尾平野及び大井荘（現大垣市）について、千年村プロット・荘園プロット・近世城下町プロットを年代別に分け、大井荘（現大垣市）の立地基盤及び対応能力について示す。【第 3 章】	②展開期（12 世紀末～ 14 世紀中頃まで） 下司職を現地荘官組織の頂点として在地領主制の発展を担うようになる。12 世紀中頃に大中臣氏による領主制が解体され、①下司職が現地住民との関係を失い、東大寺の寺僧に継承される②現地からの乖離に伴い、下司の仕事内容が実質的に年貢の得分権と化したなど、下司職の性質が変化するようになる。これに対し東大寺は、下司職、田所、公文とその下に属する名による三職支配体制を整え、大井荘は 3 分割され管理がなされる。13 世紀以降の社会的・経済的な変動に加え、年貢の重圧・守護役・大洪水による損害が発生し、農民層の分解と共に東大寺の年貢収納能力の減衰が加速した。
1-2-2. 中世・摂関期（10 世紀～ 11 世紀）における大井荘の成立	④大井荘（現大垣市）内における土地形質の転用過程について確認をする。【第 4 章】	③動揺・解体期と近世移行（14 世紀後半～ 15 世紀末頃まで） 15 世紀中頃において、石包名を中心とする小所領の一括管理が進められ、在地土豪であった大垣氏が下司代官として任命される。しかし、美濃国内の戦乱による被害や出陣を理由に未納が続く、東大寺・幕府による下司職退職に対しても大井荘惣荘名主百姓らを味方につけ集団強訴・逃散といった反撃を見せた。
1-2-3. 中世・鎌倉期（12 世紀～ 14 世紀）における大井荘の発展		15 世紀末には東大寺は代官として公人代官でなく現地の有力武士を登用し始め、大井荘学侶方代官職をほぼ独占状態するものの年貢を未進するようになり、東大寺の權威の失墜と共に年貢徴収能力及び荘園の維持機能が失われた。
1-2-4. 室町期（14 世紀～ 15 世紀）における大井荘の崩壊		④近世における大井荘から城郭への移行 中先代の乱の影響により略奪や市の機能不全を被った荘民は、人的災害に対し人・資材・食料を一か所にまとめる拠点を形成し対応した。その中心となった大垣氏は荘内で勢力を増し、やがて「大力キ」が「大力キ城」となり、天文 12（1543）年には年貢徴収の為に寺使が在住する場となっていたとされる。
1-2-5. 戦国期（15 世紀～ 16 世紀）における大井荘の解体		
1-3. 近世における大井荘から城郭への移行		
1-3-2. 大垣城について		
1-4-3. 大垣の城下町について		
1-4. 近現代以降の大垣市の様相		
1-5. まとめ		
第二章 大井荘の地質・地形と水防文化		
2-0. 本章の概要		
2-1. 現在の地形環境概要		
2-2. 地形・地質について		
2-2-1. 濃尾平野について		
2-2-2. 地質について		
2-2-3. 地形環境形成について		
2-3. 大垣で見られる特徴的な微地形		
2-3-1. 条里について		
2-3-2. 島畑について		
2-4. 大垣の輪中と水防文化について		
2-4-1. 輪中について		
2-4-2. 古代・中世の灌漑体制について		
2-4-3. 輪中と水防文化について		
2-5. まとめ		
第三章 プロットによる大井荘の立地環境の比較検討		
3-0. はじめに		
3-1. プロット概要		
3-1-1. 〈千年村〉プロット		
3-1-3. 近世城下町プロット		
3-2. プロット結果（濃尾平野において）		
3-3. プロット結果（大垣市）		
3-4. 小結		
第四章 大井荘内における形態変遷		
4-0. 本章の概要		
4-1. 大井荘の荘官屋敷分布		
4-2. まとめ		
第五章 考察		
5-1. 考察		
結論		

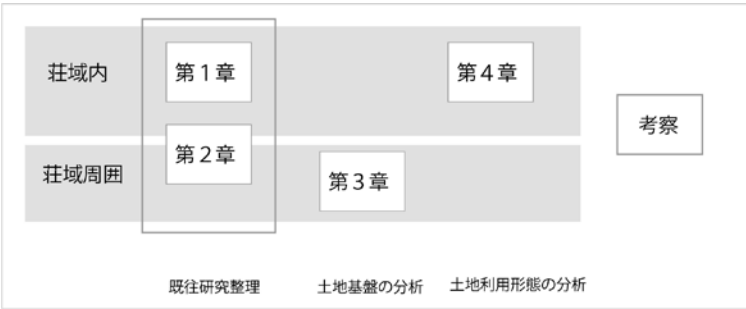


図 1 論文構成

2. 大井荘の地質・地形と水防文化

●現在の地形環境概要

大垣市は濃尾平野の西北に位置し、市内西北角に丘陵地・扇状地が見られるものの、大半は氾濫原・谷底平野が占める。

その中でも大垣市内の中心を占める旧城下町については、揖斐川・杭瀬川によって形成された扇状地帯と三角州帯の境界部分（現在のJR 大垣駅付近）に位置する。開発による盛土地が形成され、市街地の基盤となっている。境界より南側の地域については約 6400 年前には海域であり、この境界付近に 3 列の砂堆が伸びて微高地を形成している。

●濃尾平野について

平野自体が西方に傾き沈降する、沈降盆地域に属する沖積平野である。平野全体としては自然堤防が発達している傾向が見られるが、大垣市周辺においては断片的な発達として見られる。この要因として、地盤沈下が激しいこと、加えて西側では杭瀬川・東側では平野井川による砂礫層の堆積が相対的に少ないこと が挙げられる。周囲から流れ込む地下水が充満する礫層が帯水層の役割をはたしている。

●大垣の輪中と水防文化について

①自然的要因

前述の濃尾傾動運動により、木曽川は扇状地の上でその北から西へ向かって流れる傾向にある。また、流路は北西方向へ傾斜した斜面の途中に位置する為、木曽川が増水した際は美濃側に氾濫する。加えて、木曽三川の上流山間部は降水量の多い地域である。

②御囲堤による治水政策

御囲堤は、木曽川の左岸に築かれた約 50km の巨大な堤防である。近世城下町は経済的見地より河川流域沿いに立地する傾向が見られる が、同時に洪水の被害も頻出した。このような立地環境に対応すべく、文禄 3（1593）年に徳川家康の命により尾張（名古屋城）を水害から守るべく築造され、これに対して美濃側の堤防は御囲堤より 3 尺低くするよう取り決められた。これにより美濃側の洪水の脅威は低湿地帯のみならず古代の条里地割地域にも及び、局部的な水防をせざるを得なくなる。

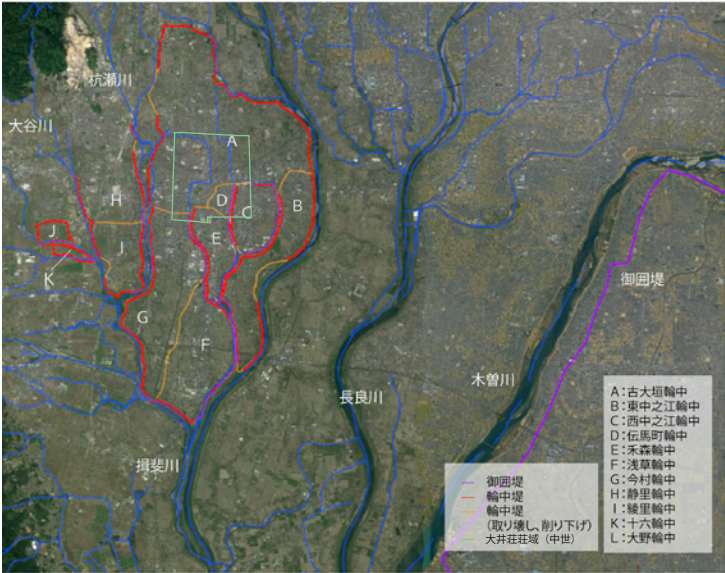


図2 大井荘荘域と大垣輪中

3. プロットによる大井荘の立地環境の比較検討

本章では、2018 年～ 2020 年度中谷礼仁研究室千年村ゼミ研究成果である、大字単位での「荘園プロット」を中心に、「〈千年村〉プロット」、「近世城下町プロット」と比較し、濃尾平野における各時代の集落分布状況を整理し、大井荘の立地の位置づけを行う。

●荘園分布

美濃国側において

A) 低地部（自然堤防帯）

B) 低地部＋沖積錐扇状地

C) 山地の谷底平野→低地部＋段丘

の順に分布傾向が見られた。

一方、尾張側においても、進出開始に約 4 世紀程度遅れはあるものの、B) 低地部（谷底平野など）＋山麓沿いの段丘、扇状地

C) 木曽川左岸側の山麓沿いの段丘、扇状地

の順に分布する傾向が見られた。

●城下町の立地傾向

近世城下町はいずれの地域においても盛土により平坦化がなされているものの、以下の地形基盤が見られる。

- ・河川付近に形成される自然堤防上の城郭・城下町（岡崎・大垣）
- ・山地斜面上の城郭＋扇状地（岐阜、移動後は扇状地＋谷底平野・氾濫平野＋自然堤防）
- ・段丘上の城郭＋谷底平野・氾濫平野の城下町（桑名・名古屋）

特に美濃国内の城郭・城下町について、10 世紀頃の荘園分布と近い、低地部（自然堤防帯）に位置することがわかる。

岐阜は城郭の移動に伴い中心となる城下町も山岳地帯から平野部扇状地へと移動したが、大垣は荘域内の微高地をそのまま城郭への転用を果たす特異性が見られる。

●大垣市内の荘園分布と輪中

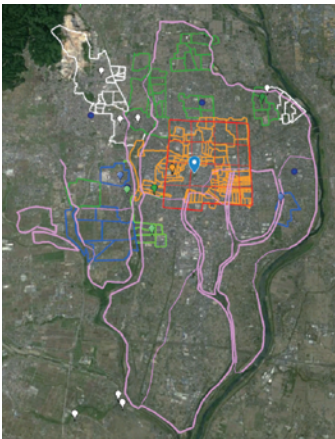


図3 大井荘荘域と大垣輪中

まとめ

立地及び自然地形の観点から、大井荘の位置する立地が中世荘園のみならず近世の城郭・城下町形成においても対応しうる地質基盤を持っていたことが明らかとなった。また、江戸期の御囲堤形成により洪水被害多発地域と化した後も、輪中を形成することで持続を可能としたことが明らかとなった。

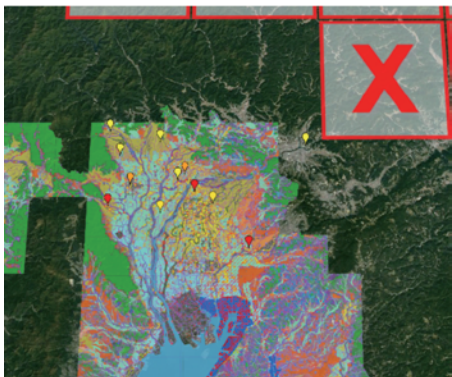


図4-1 8～11 世紀の荘園分布

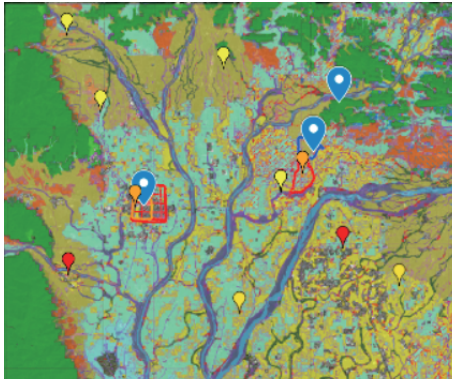


図4-4 荘園分布と城下町分布

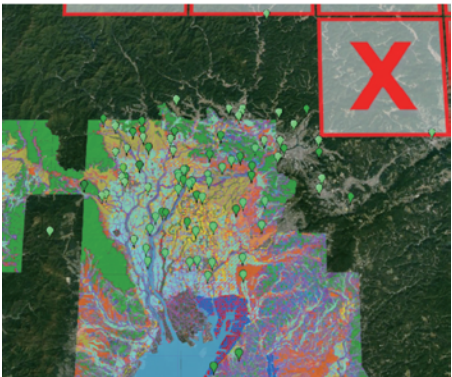


図4-2 12～13 世紀の荘園分布

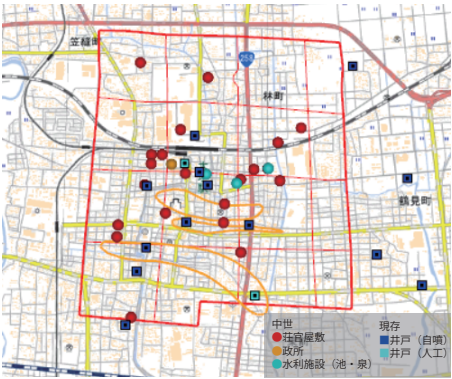


図5 大中原氏の政所および荘官居住地と水利施設

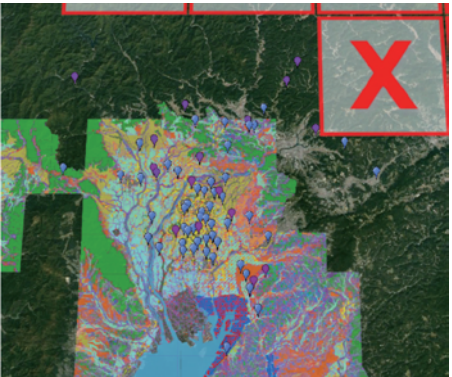


図4-3 14～15 世紀の荘園分布

4. 大井荘内における形態変遷

本章では、大井荘の荘域内部における土地利用について補足し、中世において形成された集落形態が、以降の集落形態に及ぼした影響について読みといていく。

●荘官屋敷分布

大中原氏による中世荘園としての大井荘の形成段階にあたり、荘園経営の中心地として自然災害である洪水の被害に合いにくい立地が選定されていることを示した。また、在地領主制の変化に伴い、荘園経営の中心地が条里地割・湧水群を根拠として細分化し、荘官屋敷の分布として形態に現れていること、井戸や水利施設を擁することを示した。

5. 考察

低地部（自然堤防帯）（地）と砂堆（微高地）上の政所（図）【条里地割による規定】
→荘官屋敷（地）と集中的避難（図）【人的災害への対応法による規定】
→城下町・堀（地）と大垣城（図）【大垣輪中による規定】
→現大垣市（地）と大垣城（図）

外的要因による領域の拡大抑制内で、自然地形を集落計画における根拠の形態とすることで、大井荘は土地開発を行いつつ、現在まで持続した生活が営まれた。

図版出典

図1 筆者作成
図2 GoogleEarth 航空写真に筆者加筆（参考：岐阜県大垣市教育委員会『大垣市埋蔵文化財調査報告書 第5集 大垣市遺跡詳細分布調査報告書―解説編―』p.150、海老澤衷編『中世荘園村落の環境歴史学 東大寺領美濃国大井荘の研究』（吉川弘文館、2018 年）
図3 GoogleEarth 航空写真に筆者加筆（参考：同上） 図4 GoogleEarth 航空写真に筆者加筆
図5 地理院地図標準地図に筆者加筆（参考：谷口研語「美濃国大井荘における荘官一族の領主制―大中原氏の下司職相論をめぐって―」）

結論

中世を成立起源とし、近世以降に都市化がなされつつも、現在まで持続して集落が営まれたことが確認できる、大井荘（現大垣市）を対象とし、複数荘園・城下町との比較から、地質基盤の確認を行った。これにより、古代・中世・近世における居住地の立地傾向を確認すると共に、大井荘は良質な地質基盤を活かし、局所的な開発を行うことで各時代のいずれにおいて適応可能な居住形態を形成したことを示した。

また、大井荘（現大垣市）荘域内の局所的な開発の中で、一定の領域に収まりつつ、意識的な建築計画と無意識的な集落計画の反転の繰り返しにより集落形態が変遷し、場所の固有性を規定する先行形態として見出した。

参考文献

●建築史
中谷礼仁『セヴェラルネス＋：事物連鎖と都市・建築・人間』（鹿島出版会、2011 年）
中谷礼仁『動く大地、住まいのかたち：プレート境界を旅する』（岩波書店、2017 年）
●中世史、荘園史
石母田正『中世的世界の形成』（岩波書店、1985 年）
海老澤衷『荘園公領制と中世村落』（校倉書房、2000 年）
小西瑞恵『中世都市共同体の研究』（思文閣出版、2000 年）
藤間生大『日本庄園史』（近藤書店、1947 年）
●地理学
金田章祐『微地形と中世村落』（吉川弘文館、1993 年）
矢嶋仁吉『集落地理学』（古今書店、1956 年）
●大垣市の地域史、水防文化
伊藤安男『洪水と人間 その相剋の歴史』（古今書店、2010 年）
大垣市『大垣市史 考古編』（大垣市、2011 年）
大垣市『大垣市史 輪中編』（大垣市、2008 年）
岐阜県大垣市教育委員会『大垣市埋蔵文化財調査報告書 第5集 大垣市遺跡詳細分布調査報告書―解説編―』（大垣市、1997 年）
岐阜県大垣市教育委員会『大垣市埋蔵文化財調査報告書 第8集 大垣城跡Ⅰ―太鼓門跡付近発掘調査報告書―』（大垣市、1997 年）
●大垣の荘園史
網野善彦・石井進・稲垣泰彦・永原慶二編『講座日本荘園史5 東北・関東・東海地方の荘園』（吉川弘文館、1990 年）
海老澤衷編『中世荘園村落の環境歴史学 東大寺領美濃国大井荘の研究』（吉川弘文館、2018 年）
岐阜県『岐阜県 通史編 中世』（太平社、1969 年）
岐阜県『岐阜県 通史編 近世上』（太平社、1972 年）
岐阜県『岐阜県 通史編 近世下』（太平社、1972 年）
●都市史、城下町
伊藤毅『都市の空間史』（吉川弘文館、2003 年）
佐藤滋・城下町都市研究体『図説 城下町都市』（鹿島出版会、2015 年）
玉置豊次郎『日本都市成立史 都市建設資料集成』（理工学社、1974 年）
原田彦彦『都市形態史研究』（思文閣出版、1985 年）